

## りびんぐらいぶず 令和元(2019)年10月第1号

# 信心獲得するとは何か

名号のはたらきは、私たちによって受けとめられなければなりません。名号を聞く者に認識されなければなりません。そうでなければ宗教的象徴としての働きをもちません。聞こえて下さった名号を「本願招喚(しょうかん)の勅命」と受けとめることこそ「信心」だったのです。

(Ref 石田慶和 本願寺出版社刊「これからの浄土真宗」p74)

### はじめに

施設訪問の御法話では、「らいはいのうた」のお勤めの後、こうお話しを切り出します。

「皆さん、毎日いかがお過ごしですか。

毎朝、ご飯を戴かれた後は、「朝ドラ」をご覧になりますか。私も見ます。

令和元年九月二十八日、今朝は、「なつぞら」が最終回でしたね。なつがアニメで東京を開拓するお話でした。皆さんの顔がほころんだ頃、では皆さん、喉ならしの歌を歌いましょうとご案内します。歌は「のんのさま」です。一番は「のんのさま」、二番は「なむあみだぶつ」です。二番は私のお寺「正覚寺」で誕生した仏教讃歌です。

一、ななつのうみに はしかけて、

世界をつなごう 手をつなごう

はしははしでも にじのはし

世界のこどもが あそぶはし

二、ななつのうみに はしかけて、

世界につなごう 弥陀のはし

はしははしでも 六字ばし

弥陀の浄土に わたるはし

### お名号の働きの現実にめざめるご縁

浄土真宗のお法りは、阿弥陀如来のご本願によってお救いに与っていくお法りです。

私たちはみんな例外なく、苦悩の衆生です。顔が違えば違うほどにさまざまの苦悩を抱えて苦悩しています。

苦悩の淵からお救いに与る、これが衆生にとっての共通の課題なのです。

苦悩の衆生をみそなわした眞実の世界から法蔵菩薩と現れ、四十八のご本願をお建てになり、やがて本願成就したればこそ、阿弥陀如来となってお救い下さるのです。

阿弥陀如来が衆生をお救い下さる具体的な働きのお姿がお名号だったのです。

「南無阿弥陀仏」が良く知られた六字のお名号、親鸞聖人は、「南無不可思議光仏」の八字、

「帰命尽十方無碍光如来」の十字のお名号をご一緒にお称え下さいました。

お名号は、休みなく働き続けて下さるのですが、そのことを衆生は知りません。

第十七願でお釈迦様が言葉を尽くしてお説き下さった法蔵菩薩のご本願の物語と口業讃嘆(くごうさんだん)で実際に称えてご覧遊ばしたお蔭で衆生はお名号をお聞かせに与ることができるのです。

どうしてそんなことが分かるか？

『唯信鈔文意』に親鸞聖人のお言葉で『五会法事讃(ごえほうじさん)』を釈して{第十七の願に「十方無量の諸仏にわがなをほめられん、となへられん」と誓ひたまへる}とあるからです(Ref 注釈版聖典 p703)。

そのご本願が成就することによって衆生は初めて本願成就の物語と声になって聞こえて下さる諸仏如来の名号讃嘆のお声にお会いできるのです。これを「聞名」と申します。お名号をお聞かせに与ることです。

諸仏如来の名号讃嘆によって、衆生は、阿弥陀如来のお名号の働きに遇わせて戴くことができるのです。人間世界ではお釈迦様が、「ここに阿弥陀如来のお名号が働いていて下さるんだよ。お名号の何と素晴らしいことよ」と讃嘆してお知らせ下さっているからです。

「設ひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、悉く咨嗟して、わが名を称せずは、正覚を取らじ」と第十七願に誓われた通りです。

漢訳仏典では、「咨嗟称我名(ししゃしょうがみょう)」と読み慣わされてきたのですから、その通りに頂戴致しましょう。「咨嗟(ししゃ)して」とは、お名号の謂われをお説き下さること、ご本願の物語り讃嘆(広讃)を申し、「我名を称する」とは、お名号を称えること(略讃)になります。智栄禅師(ちようぜんじ)による善導の別徳讃嘆では、「称仏六字」といふは、南無阿弥陀仏の六字をとらふるとなり。「即嘆仏」といふは、すなはち南無阿弥陀仏をとらふるは、仏をほめたてまつるになるとなり。」とある通りです。

お名号をお称え申すこと(お念仏)はそのまますお名号の功德をお讃え申すことを意味しますので「略讃」と称されるのです。

お釈迦様の名号讃嘆のお姿を仰ぎ、お声に聞き入られたのは誰か。阿弥陀経には舍利弗(しゃりほ)以下千二百五十人の大比丘衆とも説かれるお釈迦様の声聞衆です。

お名号の功德をお説き下さるお釈迦様のお姿を仰ぎ、称歎のお声をお聞かせに与ることによってお弟子様方はお名号の働きの現実に初めて目覚められたのです。

爾来、その歡喜は、七高僧を経て親鸞聖人へと引き継がれて参りました。そしてとうとう、称えつつ、聞こえて下さるお喚び声に喚び覚まされる「聞名(もんみょう)のお法り」が親鸞聖人を通して私たちの前に明らかにされたのです。

親鸞聖人はお説き下さいます。

「大行とはすなわち無碍光如来の名を称するなり」と。大行の「大」とは、如来様の行を意味します。大行を「南無」の言は「帰命」のお心に従って、如来様は、衆生に本願力回向して下さるのです。本願力回向された大行とは、易しく云えば「さあ、称えてごらん」と如来様の行をお与え下さったのだということが出来ます。如来様の行である大行を本願力回向してお与え下さっているからです。

南無阿彌陀佛の「南無」の言は帰命なり。帰せよの命、「発願廻向」の言は、如来既に発願して衆生の行を回施したまふの心なりと親鸞聖人は仰せ下さったからです。称える行は、見た目では私の行ずる行でありながら、行ずるとき、直ちに如来様の大行が私の身の上に働き出して下さるのです。

それゆゑ、称えれば直ちに聞こえて下さるお名号は、私を喚び続けていて下さる阿彌陀如来直々のお喚び声だったということになるのであります。これを「本願招喚の勅命」と申します。「勅命」とは、法律等の形式に依らず天皇が直接、配下の機関に発せられた命令を指します(Ref 広辞苑)。

本願招喚の勅命とは、阿彌陀如来が本願のお心から、「ワレヲタノメ、ワレニマカセヨ」と衆生に直々に発せられたご命令だということになるのであります。

ですので「勅命」を「勅命」と受けとめるとき、信心獲得し、衆生はお救いに与るのです。

「信心獲得の時剋(じこく)」の「そのとき」です。その瞬間、私は清らかな心の宝石を阿彌陀如来から頂戴するのです。当院の寺号に示された宝石山正覚寺の「宝石」です。

これを第十八願に相当するサンスクリット本では、初めて愚かな胸の中に如来様の「智慧」が宿って下さると示されているのです。

御門徒さんのお逮夜参りのある朝の出来事でした。お勤めを終って祖父母と住職がお念仏し合掌礼拝する姿を見た二歳の幼な児が「何をしているの」と尋ねました。

二歳にして祖父母の称名讃仰(さんごう)の姿が目に残ったのです。驚きでした。

住職が「如来様のお喚び声をお聞かせに与っているの」と応えると、祖父母に連れて頭を垂れ、「ありがとう」とはっきり口に出してくれたのです。終って上がりがまちまで住職を見送り、頭を垂れ、「ありがとう」と繰り返してくれた姿を住職はしかとこの目で見届けたのでした。

合掌。

仏壮お聴聞の会(ご法話会)十月六日(日)二十時より

仏教婦人会例会 十月十六日(水)十九時半より

正覚寺報恩講 大逮夜 十月二十六日(土)十四時～、お初夜十八時五十分～

満日中 十月二十七日(日)午前十時～

お客僧 本願寺派布教使 山本 泉茂師

尚、一週間前の十月十九日、二十日は徳勝寺様の報恩講です。お客僧には、当院のお聴聞の会に平素よりおいで戴いている安堂 芳雅布教使様です。あわせてお聴聞戴ければ幸いです。

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内)〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥